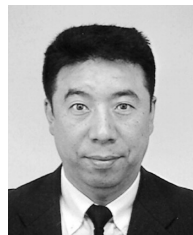


Departure

English Expression

コミュニケーション活動で文法力も伸ばす

麻生雄治



新科目の「英語表現」が導入されて2年が経つが、どのように授業を展開すると学習者の表現力は効果的に育成されるだろうか。本稿では、教科書を十分に活用し、実際に表現力育成において成果をあげつつある、筆者の前任校（大分県立大分上野丘高等学校）での取り組みを紹介したい。

＜・・指導の基本コンセプト

- (1) 理解→暗唱→表現のサイクルで、最終的には自分の意見や考えを英語で自由に表現できることを目指す。
- (2) 教師が一方的に教え込むのではなく、生徒の自学を促すよう、学習者中心の学び合う授業スタイルを構築する。
- (3) ペア活動やグループ活動を多用し、表現する機会をできるだけ多く与え、「使える」という実感と自信を持たせる。
- (4) 単純に書くだけ、話すだけの活動ではなく、聞いて（または読んで）書く（または話す）、話して（または聞いて）書く、あるいは書いて話す、のように技能を統合した活動を多用する。
- (5) 時間を計測しながら（例えば1分間に何語話せるかの計測や、70語を15分で書く、あるいは100語を20分で書くといった timed writing など）活動に取り組み、即興性や瞬発力を鍛える。

＜・・導入のモデル英文

Departure English Expression I では、各課の最初にモデル英文がある。ここでは音声CDの英文を聞き、聞き取れた情報をペアの相手に英語で伝え合ったり、あるいは全文を3～4回聞く間に

できるだけ多くの英文を書き取ったり（全文ディクテーション）することで内容を確認する。これによりその課で学習する内容（環境、健康、旅行など）の理解が促進される。

＜・・Get Ready to Express Yourself

語（句）整序問題、空所補充問題に続いて、与えられた場面でどのように英語で表現するかを練習する Challenge! がある。この部分は、これまでの「ライティング」教科書であれば和文英訳問題になるが、この教科書では場面に応じて自分の言いたいことを自由に書いたり話したりする活動になっている。本書の特長の1つとも言えるこのタスクは、コミュニケーション能力育成の観点からも効果的であり、また授業が盛り上がるおもしろいところでもある。書くだけ、話すだけでも可だが、書いたあとに話す、あるいは話したあとに書くとも効果も増すだろう。

＜・・Get More Informed / Listen Up

空所や下線を埋めたり表を完成させる設問は、どうしても解答を補って終わりという無味乾燥な課題になりがちであるが、単なる空所補充問題としてではなく、モデルとなる英文を参考にしながら自分の立場で意見、感想、説明などをペアや全体に対して発表する活動にしている。例えば、Lesson 8の旅行の話題を扱う課では、図書館やインターネットで世界遺産について調べ、その特徴や魅力についてグループごとにプレゼンテーションする活動を行った。生徒が発表する（活躍する）場を作ることは大切である。

◀・Write on Your Own / Speak Up

自分の考えを自由に表現できるこの部分が「英語表現Ⅰ」のいわば醍醐味である。しかもこの2つの活動はうまくリンクしている。つまり、パラグラフ・ライティングのあとにそれをペアによる対話形式で伝え合うことができるように仕組みられている。また、書いた英作文をもとにその内容を口頭で発表したあと、その内容に関して司会者が質問を投げかけ、その他の生徒が答えるというインタビュー活動にしてもおもしろい。英語を話す際には、1分間で何語話せるかを（パートナーが）ワードカウンターで計測し、流暢性を高める練習をしている。発話語数は毎回記録することで、もっと話し続けようという動機づけとなっている（ワードカウンターについては今年の全英連大分大会の公開授業の中で紹介される予定である）。

自由英作文の誤りに関しては、相互で誤りを指摘したり（ピア・レスポンス）、教師（JTEとALT）が、冠詞や三単現のsの誤り（mistake）の指摘ではなく、内容や構成、表現、語彙使用に関する誤り（error）を助言・指摘したり（教師フィードバック）することで対処し、それをもとに書き直す（revise / rewrite）ようにした。

◀・時間配分

教科書の各課を概ね3授業時間+αのペースで進行すると、週2時間の「英語表現」の授業で全課を1年間で扱える。全課を通じて規則的に授業を進めるより、生徒の興味・関心が高い部分は書いたり話したりする時間を通常より多くあて、じっくり取り組むほうがよい。修学旅行がオーストラリアでのファームステイということもあり、滞在先での会話練習をかねて、日本の文化や習慣についてはかなり時間をかけて取り組んだ。

◀・文法の取り扱い

「英語表現」の導入にともない、授業時間内の文法の明示的な指導を排除した。これまで文法参

考書と準拠問題集を利用し、文法の説明にかなりの時間を割いたが、週4時間の「ECI」と週2時間の「英語表現」では文法の詳細な説明をしないことにした。代替として、朝学習（週に1.5回、年間約50回、1回は40分間）で、文法参考書の準拠問題集をもとに基本的な部分のみの説明と演習を行った。文法指導の比重を軽くし、その分、表現練習の比重を大きくしたことにより、表現力はかなり強化されている。また、懸念された文法力もこれまでどおり着実に力をつけている。

◀・授業の成果

具体的な成果について述べるのは難しいが、全国模試やコミュニケーション能力テストにおける成績では例年以上の伸びを見せている。ファームステイでお世話になった方々との別れ際に、涙しながらも生き生きとコミュニケーションしている生徒の姿を見ると、英語によるコミュニケーション能力は確実に向上していると言えるだろう。

◀・今後の課題

これまで流暢性と正確性を高めるための活動（練習）を多く実践してきたが、さらに英文の熟達度を高めるという観点から、センテンス・コンバイニング（筆者の知る限り、センテンス・コンバイニングを詳細に扱った教科書はないと思われるが）の技術を活用するなどして、英文の複雑性を高める指導も取り入れたい。

◀・おわりに

最後に蛇足になるかもしれないが、大分上野丘高校の英語科は同僚性が高い。各学年の担当者の足並みがそろい、みな同じ教材、方法、評価で指導する体制ができている。生徒の英語力向上とあまり関係がないようにも思えるが、最近、これも大切ではないかと思えてならない。

（あそう ゆうじ・長崎県立大学講師）